

激派が居るからと云ふて味憎も糞も一緒に袋たきにするのは情に忍びない處である。千名の敵を殺して大砲を取りかへすことも出来るが罪なき住民千名を殺さねばならむ。こんな事をすると過激派以上の大悪人になる。さりとて恨重なる敵に對して復讐をせねばならむ。

支隊長は砲撃の命を下さない。第一線の各隊長も小銃を村に向つて發射せない。宗讓の仁と云はれ云へこの玉石をより分けてでなければ手を下し得ん。之が爲には敵を村の外に追ひ出して置いて敵が最上の策だ。其配備に陣を立てかへ砲兵陣地も位置を變換することとした。其間に敵は逃げだした前方の山口斥候は盛んに射撃をする側方

に迫つた八木中隊も亦射撃する砲兵も撃ち出した。敵は大混亂橋の上に乗せてある糧食から下敷の干草。自分の着て居る防寒具果ては小銃機關銃を投げ出して重量を軽くし馬に鞭つて命からかく大敗走。我計畫通り全滅的一大痛棒を加へ得らることとなつたが、に甚だ遺憾なことになつた。それは日が既に暮れたのである。何せよマザノオを立つ時が午後の三時過ぎ。村に着いたのが夕方。冬の早い日は遠慮なく地平線下に落ち遠目が利かなくなり遂に一寸先が闇となつた。敵は此の好機に乗じ無数の武器糧秣を捨て、何れにか退却した。支隊は村に入り一時隊伍を集結し更に追撃の準備を整へた。

闇の夜であるし森の中に逃げ込んだ敵である軽忽な追撃は出来ない。斥候を四方に放つた眞の闇夜であつて誰一人聞く者もない。雪の中の櫓の跡を辿る外知る策はない。此の奇襲で方々に逃げたものらしく櫓の跡も四方にある先づ大體判断してタスキナ村に主力が逃げたものと思ふて追撃隊を此處に出すことゝなつた。

細井第三大隊長に其大隊及特殊砲隊を率ひさせて夕食後出發せしむることゝした。

予も其隊に従ふたが此の夜は風も烈しく今迄にない冷へである。追撃隊の將卒は櫓の上に互に抱き合ひながら眠さと寒さとを忍んでタスキナ村に前進し夜半の頃其處に到着した住民につい

て聞いて見ると一向敵は来ないと云ふことである切角来ても敵が此の方面に逃げて来て居らねば致方なし。又雪の夜道をトボトボと元のポチャイチに歸り曉の頃歸り着いた寒い目をして之と云ふ効果もなかつたが其方面に退却せなかつたと云ふことだけは明瞭になつた。朝になる斥候の搜索も段々と進み敵主力の退却方向も大凡察知することが出来た。此の追撃隊の者は路傍の家に入り冷へきつて居を身體を温ため朝食を喫して居ると又直ぐ出發追撃に移ると云ふ命令が来た。體も十分に温たまらず朝食も半であるが直ぐと云ふ命令であるから中止して外に出て又元の櫓に飛び乗り追撃に移ることゝな

つた此の奇襲の鹵獲品中田中支隊將卒の名のある防寒具が澤山あつた、かの砲兵の中隊長西川大尉の分もあつたが、此等の靈が必ず此の敵につき纏ふて居るに相違ない。今此の遺留品を得たと云ふことは何かの手引きであらうと思ふたが果せるかな之れが實現したのである。

靈の力と云ふものも亦恐ろしいものである。

十二、復讐—砲の奪還

支隊は敵に追及する迄不眠不休萬難を排し飽く迄追撃を續行せんとす

とはポチャーチ奇襲の翌日追撃の爲に下された支隊命令の一句

である。彼の日本海海戦に於て東郷元帥の皇國の興廢此一戦に在り云々と信號旗を旗艦の牆上高くにかゝげて最後の決心を示されしが如く此の句は支隊の爲には最後の警鐘であつた。ナポレオン、ボナバルトは、勝負の決は最後の五分間にありと僅か數字の中に戦勝の秘訣を残して置いたが洋の東西時の古今を通じて不滅不磨の一大原則である。

切り結ぶ太刀の下こそ地獄なれ

身を捨て、こそ浮ふ瀬もあれ

倉皇退却した敵を其櫓の跟跡に従ふて上下大なる決心を以て追撃を敢行した。

此の附近は山林地帯であつて雪深く道又狭くして馬の行進には

一入の困難を増した。

大隊副官原田市川兩中尉の如き疲弊しきつた瘦馬に鞭つて縦隊の先頭と後尾とを往復し命令の傳達をして居るのを橋の上から見て同情の念にたへなかつた。腦の命令を手足に傳ふる神経系統の如き役目は實に此の兩中尉の責任であつた。

稀に山間にある人家にて敵の退却方面を確かめつゝ前へ前へと猛進した。

昨夜一睡もせず追撃に服した諸隊の橋は昨朝來休みなしに驅つて居るのである。橋上の人にはウトウト居眠もするが馬は氣の毒なものだ。

橋も干草位を運ぶ農業用のものであるに重たい武装をした兵士

が三四人も載つて居るから時々破損をする。小破損は一時路外に出し修理を加へて追及するし。大破損のものは相當の金員を與へて其場で解雇。馬も亦同様である貧弱なる馬は路上に斃れ飼主に撫でられて居るのを見るのも憐れであるが大事の前の小事である情にのみからまることも出来ない。

ゼーヤ河畔雪薄く橋を馬車と代へて進んだ部隊もあつたが此の山地に入り亦橋の必要を感じたが致し方がない。深い雪の道を困難して橋と行動を共にして居たのも實にみじめであつた。最後尾に位置した橋本中尉は落伍橋或は車輛の始末及人の收容係を命ぜられ苦心をして其任を果して居た。先頭の健全なる橋は得意になつて走るが故障があつて後に残つたものは兎角遅れ勝

スカレ、スカレと急がすが前と距離があき橋上の人苦心と云ふものは筆紙の外だ。

夕方稍前にカニチと云ふ村に着いて聞くと敵と三時間行程位のへだたり迄追及をした。

地図と時計とから判断すると此處から二里許りの處にあるボウトウカ村に敵は宿泊するに相違ない。今日は夜襲をしようと思ひに勇んで行進を續けた。

第九中隊を右側に出し夜襲の配備に陣を立て直しつゝ、村に接近した。日は全く暮れて星さへ見へず。鼻摘まれても知らないと思ふ闇夜である。

ボウトウカ村の燈火がチラ／＼と見え夜襲の目標に好適である。

この夜襲と云ふものは晝間から十分準備を備へ綿密なる計畫の下に決行せんと錯誤を來し遂には友軍相撃等と云ふことを演じ失敗に終り易いものである。

大部隊を以てした夜襲に成功の戦史が無いと云ふ位だ。

今晚は眞の闇に未知の土地に着いて之を決行せんとするのであるから餘程の決心と注意を要するわけだ。各隊は互に戒め合ひ連絡を密に保ち集結して静々と村に接近した。あちこちで狼火様の燃き火が時々起り何かの信號らしく思はる。

前方の將校斥候は敵情と地形との偵知に大に努めたが敵の主力は居ないらしい。一部の者は居たが支隊の到着を知り逃げたと云ふ報告である。

兎に角村迄と警戒して進んだが斥候の偵察通り敵は居なかつた時に夜半の十一時。

晩食もまだせず馬にも飲ひ馬糧も與へてない支隊はこゝで二三時間の大休止をすることゝなつた路傍の民家に入り飯をたき馬にも糧秣をあてがひ再び追撃の準備を整へた。

不眠不休の決心であるが之だけのことは是非せないと活動の力がなくなる。前晩もねず。今晚も亦休まず随分ねむけを催す。此處で状態を収集すると二里ばかり前のマルガリトゥカ村に敵の主力が泊つて居ると云ふことだ。

午前二時出發拂曉攻撃と決心し再び橋上の人となつた。

今度こそはと思ふて明け方の寒さに身を引き締め。霧に包まる

、此の村を包圍し夜のホノボノと明け初むる頃に。本田第十中隊を真先に銃剣を振つて突入した。又失敗つた空だつた。

斯く迄天は正義の軍に味方せんのかと恨むだが止むを得ん。

家宅搜索をすると逃げそこなひの敵兵十數名を俘虜とした是等の者は出發時刻を忘れ寝すごした連中である。時間勵行と云ふことを守らんとこんな目に遇ふ。

俘虜の言によるとポチャーチ以來連日連夜の猛烈なる追撃に僻易し志氣大に沮喪し此處迄にも大分離散したと云ふことである。俘虜の訊問中に朝食をせよとのこととで路上に火を燃き暖を取りつゝ、昨晩たいだ飯をあたくめて食事をした。

此處に憐れなる話があるそれは
予の隊附の田中曹長が茶を得んが爲一民家に立ち寄ると入口に
老婆及二人の年頃の娘が膝まづき手を前にあげて憐れを乞ふ姿で
泣いて居る。

チャイ、ダワイ(茶をくれ)

と云ふて内に入つて見ると奥の床の上に主人が血に染まつて斃
れて居る。

之を見て氣がつき會話篇を取り出し物好きに聞いて見ると。

昨夜此の家に泊まつた過激派が此の二人の娘に手をかけよう
としたから主人が多少庇護したのらしい、犖犖な彼等は面倒と
主人を射殺したものでらしと窺はれる。

實に悲惨なことである。敵討をしてやる主人を懇ろに弔へと片
言交りに弔辭を述べて其家を辭した。追ひまくられながらも猶
斯くの如き罪惡を同胞に敢てして居るのだ。
敵の主力の退却方向を察するとオセクレセノカ村に逃げた様
に思はるゝ此の現在の村は山の奥底であつて道としては今支隊
が来たものゝ外には圖上には無い。
オセクレセノカ方向へは只山中の小徑があるばかりらしい彼
等は此の谷底に追ひ込まれ逃げるに路無く進退窮して僅か山間
の一小徑を辿つて退却をしたのだ餘程土地の事情に精通して居
らねば此の山越は困難である大砲の如きは兎ても通れんと住民
は口を揃へて云ふ一般の地勢を按じても其通りである。

敵は然し例の大砲二門をひいて逃げたと云ふ話である。支隊は更に之を追撃する決心は變更せんが土地の事情も知らん吾々が斯くの如き山道に態々入り道迷ふのも感服せぬこと殊に支隊には野砲兵大隊が附いて居る。おまけに米は一粒も無くなつた此の村でパンなり馬糧を求めんとすれど山間の一寒村家數も少なく又敵が昨夜來既に徴發した後である。糧食なしに此の危地に何ぼ敵が逃げたかと云ふて進むは無茶である。此の六百有餘の陛下の赤子を斯く迄苦しめることは出来ない支隊長は此の危地を避け迂回して敵を追撃するに決せられ一旦カニチ迄後退した。

昨夜半一般の状況と糧食の缺乏とをポチカレオにある山田少將の下に西田曹長を遣はし報告してあるから此の村で待つこと、した。

支隊は此の村で糧秣の補充をし更に別道より行動するにせよ敵の荷も通過した道であるから追撃の爲めの斥候だけは派遣せねばならむ。

此の斥候は餘程危険なる任務である。

山口敏彦中尉(現大尉)が此の命を承つた。

剛毅にして沈勇なる山口中尉は六名の部下と大曲露語通譯とを率ひ堅固なる橋三臺に分乗し數日分の糧食を用意し敵の通つた橋の跟を頼りに山中に入つた。

支隊はカニチに於て小島中隊の護送して來た糧食を受け取り二

十六日早朝追撃前進に移ることゝした。一日有餘待ち明したが一向山口斥候から報告が来ない山中で事無ければよいが一同は心配をしてゐた。遅いのも無理からん山口斥候は實に往復里程四十里の活躍をしたのである險阻なる山を乗り越しオセクレセノカ村迄行つて情報をあげて歸つて来たのである此の四十里の道を三十時間で突破したのであるから餘程早い方なのである千餘名の敵の後を僅か七名の者が然も廿數里の山越をして追ふていつたのだ男の中の男でないとのだけのことをやれない勇敢なる斥候の模範とすることが出来る。其報告に曰く。

オセクレセノカ村に行き村長等に聞くに敵は散り散りバラバラ疲労困憊の状を以て此の村を通過したが大砲等は持つて居なかつたと。察するに此の山中に大砲は隠匿して敵は離散したものであらう。歸途其隠匿位置を搜索したが何せよ十數里の山道であるから見出すことが出来なかつた。目指す大砲は先づ我支隊の急追で動きもつかぬ山中に引き入るゝの止むなきに至り之を隠匿し草賊共は離散をすることゝなつたものらしい。我手中に奪還し得らるゝ運命に向つたのである。さりながら其位置がわからぬ搜索は仲々事ものだ。岡田支隊長は山口斥候の報告に接し開運の曙光を認めし事をよ

ろこんで居らるゝ時不思議なるかな路傍に見覚えのある二人の露西亞青年が立つて居る。あの顔はと更に見つむると嘗て數日前クラスノヤロウ村にて支隊長の旅舎となつた家の壁間に掲げてあつた寫眞の二人である。露西亞の家に行くとき壁間に家族及親類共の寫眞を飾つてある日本の掛けものゝ様に心得て居る。此の家の主人は自分の息子二人が過激派に雇はれて櫓の人夫としてどこかに行つて居ると云ふて寫眞を示し安否を氣づかいて支隊長に話して居たのだ。其時見て目に覺へのある二人の顔だ紛れもなき寫眞の兄弟だ。支隊長は直ぐ櫓を止め近藤通譯に其二人を呼び止めさせた。二人の者は戦々兢兢傍に來た。

汝等はクラスノヤロウの青い門の家の息子で兄弟であらう？
二人は實に驚いた顔をしたが。圖星を指された爲かすぐ。

ダア、ダア(然り)

と答へた。

どうして此處に？

四邊を見廻し頓と返答せん。

だから支隊長も櫓から下り路傍の家に入つて。

懇ろに。

余は汝等の家に二三日厄介になつて両親と近づき汝等の不在を共に心配した者である安心して實を告げよ。
之を聞き安心の色を見せ。

此の支隊の橋人夫の中に澤山過激派が交つて居るし同じ所の者も居るから自分達が種々話しをすると後難が恐ろしい。と答へた。

そこで窓掛を引き人を拂ひて種々尋ねると。

大砲を有する過激派の集團は連日連夜の日本軍の急追に閉口し散ち散りバラ／＼余等はトルバカタイから解雇せられ今歸宅の途中である。

大砲の事に言及せんから。

「其大砲は如何に山中にかくして置いたろう」

「ハイ」

「其位置はどこだ汝が云ふたことを誰にも知らさぬから云へ」

「オセクレセノ一カ村北方の山中一里の谷の中に引き入れ若干の監視兵を置いた」

先の山口斥候のオセクレセノ一カ村に大砲が來なかつたと云ふ報告と今この若者の云ふこと、一致する處があるから大に信ずるに足ること、し更に詳細に其位置を尋ね大體の要領を得たからして謝禮の金員と日本軍に忠實なりし證明(之は變だけれど彼等は要求するのだ良民であると云ふことの證明に使ふのらしい)とを與へ猶親父へ傳言を托して此地を去らしめた。

天祐と云はふか神助と云はうか恨の的である大砲は吾等の手に入るべき時となつたのである此の大砲を奪還して田中支隊の復讐をせんが爲三月四日命令を受けて以來あらゆる辛苦を嘗め寒

氣飢餓と戦ひ犠牲者をも出して廿數日間奮闘をして居るのだ。入浴等は思も寄らぬ軍服の釦も脱した事もなく不眠不休の有様露西亞家屋に泊まるも寢臺とてなく床に干草を敷いて寝るのであるから南京蟲に手頸を刺され襦袢ズボン下にも虱をわかし艱難のあらん限りを盡して行動をして居るのである。其恨の的である我野砲二門を奪還し得べき糸口を得た。支隊長以下將卒の喜びは實に譬ふるに物がない有様で。垢だらけとなり髭蓬々の顔にも喜色が満面に漂ふて居る支隊長は直ちに細井第三大隊長を呼び之が奪還に向ふべき命令を與へ左の諸隊を配屬した。

八木大尉の率ふる歩兵第九中隊。

重川騎兵小隊。

第十二師團より配屬の神保騎兵中隊。

同 野砲兵小隊(輓具のみ携行)。

支隊は此のオジョールナ村に宿營し吉報を待つこととした。

此の派遣隊は午後二時半頃に出發し意氣揚々オセクレセノーカ村方向に前進した。

此の村迄は七里計りもあるから夜になつて其村に着いた早々山に入りたいが暗くて仕事が出来ん一夜こゝで明すこととした。

支隊は此の村より一般の状況は林軍曹を山田少將の下に派遣して報告をした。

一日千秋の思とは此の時の支隊將卒の心であつた。

翌二十七日午前九時頃に至るも派遣隊から砲奪還の報告が無い。昨夜敵の間諜が入り込み柳澤機關銃隊で取りをさへた位であるから又敵が何とかしては居やせないだらうかと支隊長は種々と案ぜられ予に對し左の任務を課せられた。

貴官は下士以下六名を率ひ成るべく速に砲の奪還に向へる第三大隊長に連絡し其状況を確かめ且つ砲奪還後はバアロフカに至り支隊に合致せよとの命令を傳達せよ。予は直ぐ様出發此の村人中地形の明るき一名の雇人を道案内に山中の近道を最大速度を出して橋を走らした。鹽梅よく砲が取れて居ればよいがと思ふて四五里行くと派遣隊の騎兵の傳令三名と遭遇した。聲の届くところから大砲はどう

かと尋ねると只今手に入れましたと云ふことであつた予等七名は思はず萬歳を叫んだ。

此の傳騎が派遣隊長より支隊長への報告を持つて居たから裏に矢守斥候は此の吉報に接し萬歳を唱しつゝ更に前進し派遣隊長に支隊長の命令を傳達せんとす。

と云ふ事を附記し傳記に近道を教へ急行せしめた。予等はうれしさの餘り夢中になつてしばらく走り續けて居たが不圖考へたあの騎兵に近道を教へたが山道の一小徑であるから迷はせんか知らんとそこで予は西田軍曹現曹長に口頭にて報告の要旨を傳へ二重になつても良いからと思ひ支隊長へ報告に返した。

予等がオセクレセノカ村に着いた時は丁度山から大砲を野砲兵小隊の者が引き派遣隊が凱歌を奏して下りて来た時であつた。吾等は派遣隊將卒に祝辭を述べ細井隊長に支隊長の命を傳へた。派遣隊長より聞くに砲は谷間に引き込み監視兵が配置してあつたが幸に其一人を俘虜とすることが出来て夫に案内せしめ漸く位置を知つて奪還したとのでまつた。此大砲を見れば田中支隊長奮戦の状がありありと偲ばれる。無数の小銃弾が砲に命中し弾痕を留め又防楯の如き後から小銃弾が貫通して居る。嗚呼此の砲を枕に西川大尉以下の者が戦死したのである。田中支隊長以下三百有餘の靈が此の野砲に付き纏ふて居る。無限の感に打たれ此の靈砲に對しては思はず頭が垂るゝのであ

る。
過激派共を一人づゝ虱つぶしにして其恨を報ゆることは出来なかつたが此の砲を奪ひ還して會稽の恥は雪ぎ支隊奮闘の目的は芽出度茲に達した次第であつた。
此の核心を失ひし敵兵等は蜘蛛の子を散らした如く跡方を留めず散亂し爾來ゼーヤ河畔一帯の地はしばらく平靜に歸し露民共は堵に安んじて業に服し大に皇軍の恩恵を謳歌した。
支隊は翌二十八日パウロフカに於て凱旋の祝盃を舉げ萬歳を唱したのである。

席上岡田支隊長は感極まつて左の祝詞的訓示を述べられた。

諸君我支隊編成以來茲二十有六日此ノ間祁寒ニ堪へ困苦缺乏

ヲ忍ビ全力ヲ擧ゲテ餘蘊ナシ一度「ボチカレオ」ノ救援ニ一擧八十有露里ヲ突破シテ敵ノ計畫ヲ挫折セシメ二度「ボチヤーチ」ニ奇襲ヲ行ヒ醜虜ノ肝膽ヲ寒カラシム爾來連日連夜不眠不休以テ敵ヲ急追シ遂ニ彼レヲシテ窮餘其主力ノ代表物タル砲二門ヲ我支隊ニ委シテ潰亂スルニ至ラシメタリ嗚呼何等ノ痛快ゾヤ是レ偏ニ將校以下各員ガ不撓不屈ノ忍耐ト堅忍不拔ノ勇氣ヲ以テ義勇公ニ奉シタル結果ニ外ナラス不肖岡田微力ヲ以テ任ヲ支隊長ニ負フ感謝寔ニ言フ所ヲ知ラス各員夫レ之ヲ諒セラレシコトヲ

大正八年三月二十八日

支隊長 岡田歩兵大佐

猶第十二第三師團長より祝電を寄せられて砲の奪還を喜ばれた。

第十二師團長大井閣下よりの電報。

堅忍萬難ヲ排除シ任務ヲ敢行シテ遂ニ火砲奪還ノ目的ヲ達シタル貴官以下將卒ノ奮勵努力ハ本職ノ頗ル満足スル所ナリ而シテ敵軍盡滅ノ爲ニハ尙暫ク貴官及部下ノ奮闘ヲ切望スルモノアリ敢テ最後ノ成切ヲ祈ル

第三師團長大庭閣下よりの電報

岡田支隊連日ノ勇敢ナル行動ヲ喜ビ全隊ノ健康ト成功ヲ祈ル砲二門ヲ奪還セル貴聯隊ノ成功ヲ祝ス

支隊は此の大砲を土産にボチカレオにある山田旅團長の下に復歸し首尾克く其任を了へた。爾來一ヶ月有餘此のボチカレオ及ブラゴエチエンスクの守備勤務に服し一部の者は山地に逃げ込

んだ少數の過激派が平地を窺ふものあるを聞く度毎に討伐に向ふたが特に記する程の事もなく黒龍州は極めて平穩であつた。岡田支隊も駐陣の要もなくなり五月半に此の地を立つて元のザバイカル州に復歸することゝなつた。

山田旅團長よりは其隸下を去るに際し左の感謝狀を贈られた。

大正八年二月二十五日ヨリ同二十六日ニ互リ我旅團ニ屬スル田中支隊ガ約八倍ノ敵ト遭遇シ全滅的奮闘ヲ爲シ同時ニ野砲二門ヲ敵手ニ委シタルハ誠ニ悲憤ニ堪ヘザリシ所爾來旅團ハ若心慘憺極力該砲ヲ有スル敵主力ヲ急追長驅實ニ一ヶ月行程三百里ニ互レリ此間貴聯隊ハ遠路來援早々追撃ノ任務ニ就キ特ニ三月十五日我軍略上ノ要點タル「ボチカレオ」守備隊ガ約五

倍ノ敵ヨリ包圍セララル・ヤ不眠不休ノ奮勵ヲ以テ十二時間ニ二十餘里ヲ急行シ以テ該要點ノ危急ヲ救ヒ次テ三月二十二日「ボチヤーチ」ニ在ル敵ヲ不意ニ急襲シ敵ヲ倉皇散亂ノ苦境ニ陥レ其機關銃一及小銃數十竝ニ軍需品ヲ鹵獲シ更ニ急追シテ同月二十七日終ニ曩ニ奪取セラレタル我野砲二門ヲ奪還シ敵主力ヲシテ瓦解スルノ運命ニ陥ラシメ更ニ各地ノ掃蕩ニ從ヒ旅團作戰目的ノ達成上偉大ナル效果ヲ與ヘラレタルハ本職ノ衷心ヨリ感謝スル所茲ニ謹テ敬意ヲ表ス

大正八年五月十一日

步兵第十三旅團長 山田四郎

歸途「ボチカレオ」を出發した予等は車窓から感慨深き山川を眺め

地下に眠れる忠勇なる戦友に名残を惜しみつゝ元の往路を辿つてチタの近傍ペスチャレカ兵營に歸り着いた。大庭師團長は兵營に吾等を迎へられて一條の祝詞を述べられたが發言第一に。

今日芽出度凱旋者を迎ふるにあたり特に思ひ起すは諸子等と共に此の地に歸らぬ戦死者のあることである。

師團長は此の國難に殉せし者あるを聞く毎に遺族に對し弔電を發し之を慰めた。

諸子の赫々たる名譽の後には是等忠士の靈がついて居ると云ふことを忘れてはならぬ云々。

さしも永かつた西比利亞の冬も此頃は氷解けて川の流れも緩る

く野原一面は芝生となり木々の梢に若芽を宿した。

我聯隊に於ては吉日を選んで兵營内に祭れる大神宮の社に凱旋の報告祭を行ひ又清差なる地を卜して祭壇を設け戦病死者の靈を招いて海山の物を供へ厚き祭典を施行した。

此の地の新緑は實に雄大であつて棲むに心よき處である駐陣の無聊を慰さむる爲兵營近くにあるインゴタ河に釣を垂れ或は駒を野原に馳せて浩然の氣を養ふた。

六月下旬より八月半頃迄は暑く内地の夏と變らない。八月末には既に寒さを催し冬服を着用した。

九月の初め方廣島第五師團と交代し内地に凱旋することゝなつた。

著者は武運拙く春の行動以來健康を害し遂に入院の止むなきに至り隊伍を離れて獨り寂しく内地に歸還をしたからこの凱旋の樂しみを味ふことも出來ず從つて之を讀者諸君に紹介することの出來ないのは遺憾であるが此處に田中支隊勇戦の有様と之が弔合戦の爲岡田支隊廿數日の行動とを拙き筆を以て記述し一般讀者諸君の高覽に供し亡き戦友の靈を弔ふことを得しは著者の深く光榮とし且つ感謝する處である。(終り)

機隊の弔合戦終

大正十年七月二十五日印刷
大正十年七月二十八日發行

著者 矢守貞吉

東京府下大森不入斗一三六四

發行者 松村次郎

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷者 赤羽正己

東京府下大森不入斗一三六四

發行所 辛曉社

振替口座東京五七一七三番

不許
複製

394
71

終